

世界の舞台性と飢えの根源性 —レヴィナスの方法論—

藤岡俊博

本発表は、『存在の彼方へ』において「語ること（le dire）」と「語られたこと（le dit）」の対概念として結実するレヴィナスの方法論が、『実存から実存者へ』および『全体性と無限』での演劇にまつわる議論や、『存在の彼方へ』の「ケリュグマ」概念などを經由して、世界の「舞台性」という観点から通時的に解釈できることを示した。そのうえで、初期著作から一貫して現れる「飢え（faim）」の問題が、倫理を介して観想と実践の伝統的対立の超克をめざす『全体性と無限』や 70 年代以降の思想のうちでどのような方法論的意味をもつのかを、「世俗化と飢え」などのテキストの検討を通じて明らかにした。

第 1 節では、レヴィナスの倫理は存在論的差異の全体と「語ること」との第二の差異で構成されるというマリオンの指摘を踏まえて、レヴィナスが存在論を「語られたこと」の内部に位置づけることを確認した。「語られたこと」は、レヴィナスがフッサールの志向性とハイデガーの「として（als）」構造に依拠して定式化した、「あれとしてのこれ（ceci en tant que cela）」という同一化作用の土台である。第 2 節では、『全体性と無限』冒頭の「現象学的方法」をめぐる記述における「演繹（déduction）」と「還元（réduction）」の取り違いの可能性の問題を取り上げ、タミニョーの証言に反して「演繹」の語を保持したレヴィナスが、現象学的方法を抽象的意義からの「舞台演出（mise en scène）」の再構成とみなしていることに注目する。第 3 節では、「語られたこと」が世界の「舞台性」として、レヴィナスの思想にさまざまなかたちで見られることを具体的に示した。遺稿に頻出する「飾り布（draperie）」の落下が比喩的に表す「意味の終焉」は、サーカスが去ったあとの舞台の例で語られ、『実存から実存者へ』は怠惰・疲労・努力といった存在と存在者の二重性をあらわにする身体的現象を「舞台上の現実」との対比で論じる。『全体性と無限』もまた、「何性（quiddité）」の問いが「なにとしてなのか（en tant que quoi）」の問いであることを強調する点で、世界の「舞台性」という着想を維持した。他方で、こうした世界＝舞台を眺める「観客の主体」は、プラトンの『国家』に登場するギュゲースの形象を介して、「これ」を「それ」として同定しながらもこの同一化を可能にする「語られたこと」の舞台を忘却する観想的思考として提示される。第 4 節では、「語られたこと」なき「語ること」に移行する起点となりうる根源的な「飢え」の次元に着目する。レヴィナスは対象によって充足される「飢え」である志向性の背後に、この「飢え」の空虚を可能にする根源的な「飢え」を認める。『存在の彼方へ』と同時期の「世俗化と飢え」および『神・死・時間』講義は、観想と結びついた人間の実践的意味を問い直しながら、「私自身の飢えの記憶から隣人の苦しみと飢えへの責任へと向かう転移の力」に、「存在論の彼方」であるような超越を見出している。本発表は最後に、「私」という一人称で語られるレヴィナスの自己贈与の思想のうちに、私から私への超越の可能性が託されていることを指摘した。